

手紙

加藤文子

納屋のあちこちに夫の制作したやきものが点在している。衣類を入れたはずのケースを開けると、やきものが姿をあらわす。ストックしておいた段ボールを使おうと思って取り出してみると、中から陶のオブジェが転がり出る。

あらためて納屋を確認したところ、思いがけない所に無造作に仕舞い込まれていることが判明した。

当初やきものは通路をはさんで向かって右側の領域に仕舞い、日用品やらその他を左側に納める、そう決めていたのだが、いつの間にか無効になっていったようだ。できるうちに、どうかしておかなければ先々困る。

この事態を打開するべく、全体を片づけていくことにした。

そのうちいくつかの衣装ケースには数十年分の手紙が入れてある。年賀状をはじめ、ハガキや封



書がぎつしり詰まっている。こちらも放つてはおけない量だ。目を通しながら、仕分けをする。パソコンのなかった時代は特別だ。巻紙に草書で流れるようにしたためられていたり、うっすら藍で染められた手漉き和紙の便箋と封筒に筆で大胆につづられていたり……。最近では滅多に手にすることのないような個性のお便りがたくさんある。ハガキも小さな文字で紙面いっぱい書かれているのが多い。近況やお礼、原稿の校正のやりとり、スケジュールの問い合わせなど、様々な用向きで手紙が交わされた。

読み返して覚えていることもあれば、忘れていてまるで初めて知ったように思える事柄もある。あたたかな手紙に心が熱くなったり、お世話になったのに感謝が足りなかったように思えたり、いちどきにたくさんの人々と会っているような心持ちになって、いろいろな自分が出てきて、心が揺れる。ここ数日、再会ムードになっている。

たくさんの方々から寄せられたお便り、今日もご縁が続いている方もあれば、途絶えてしまった方もある。けれどその時、その時、それぞれの思いでペンを手にした瞬間が、息遣いが文字から伝わってくる。なつかしの、なつかしのかつてが思い出され、現在、この今のことを考えている。

読み返すいつかがあるのだろうかと思いつつ、心に留めておきたい手紙をもう一度仕舞い直す。

納屋が整うまでしばらく時間がかかりそうだ。



丹頂草の花とみどり